Initiatives of Change
一人ひとりのチェンジで信頼を築く

IC ニュース NEWS

Vol.37

公益社団法人　国際IC日本協会

発行年月日 2023年4月10日
発行所 公益社団法人 国際IC日本協会
〒160-0004 東京都新宿区四谷4-28-20
パレ・エテルネル206号
TEL：03-6273-1428 FAX 03-6273-1429
E-Mail：info@iofc.jp HP：http://iofc.jp
<International IofC>HP：www.iofc.orc

頒価 1部 200円

東南アジアにおけるIC/MRA活動　会長　藤田　幸久

３月にカンボジアとタイを訪問し、国際 IC 関係者と交流してきました。カンボジアではソン・スーベール枢密院委員（元国会副議長）のお宅に泊めて頂き、カンボジア IC の方々とお会いしました。

右中央がスーベールさん

彼とは 1980 年にタイのバンコックで劇的に出逢いました。彼も私も MRA の国際親善使節 Song of Asia に異なる時期に参加していたため初めての出逢いでした。これがご縁で相馬雪香さんが前年に設立した難民を助ける会（AAR）のプロジェクトを数年間受け入れて頂きました。カンボジアと MRA/IC との関りは、1954 年にスーベールさんの父上のソン・サン元首相とフランス財務省勤務の MRA の人との出逢いが始まりです。

1984 年に相馬雪香さんなどと MRA 国際チームはタイ・カンボジア国境の難民キャンプを訪問し、ソン・サン元首相や仏教僧数名と対話しました。その一人が「カンボジアは全てを失いました。人命も国土も。しかし、最も大きな損失は何が正しくて、何が間違っているかという、善悪の判断を失ったことです」と語ったことが強く記憶に残っています。

左がソン・サン元首相、中央が相馬雪香さん、右がマッケンジー元英国大使

ソン・サン元首相は 1983 年土光敏夫国際 MRA 日本協会会長（経団連会長）、オランダのフィリップス元フィリップス電器会長（コー円卓会議創設者）などと東京の MRA 国際会議に出席しました。

内戦やポル・ポト派による大虐殺を経て 1980 年代後半にプノンペン政府と国外に拠点を持つ３つの政党との和平交渉が始まりましたが、それに先立つ 1985 年にスイス・コーの MRA 会議でこの両者による初の会談を行いました。1991 年のカンボジア和平後の 1993 年と 94 年にはカンボジアで各派間の信頼醸成を目指す MRA 国際会議を開催しました。
今回は、その会議に参加したソー・ケン副首相兼内務大臣などと旧交を温めました。また MRA/IC の長い友人で現在亡命活動中のサム・レンシー元野党党首の支援者、世界宗教者平和会議（WCRP）のテプ・ボン会長や多くの NGO の方々とも再会しました。さらにフン・セン首相の長男で次期首相に指名されているフン・マネット陸軍司令官やサイ・サムオル環境大臣など次世代のリーダーとも会談しました。

驚いたことに、立場の異なる政治指導者から日韓首脳会談と両国関係の改善への高い評価が示されました。アジアの緊張関係はロシア、中国、北朝鮮、台湾など北東アジアを巡るもので、その関係改善は、大国間の板挟みになっている東南アジアにとって有難いとの声がズシンと響きました。
タイではドイツ外務省のシンクタンクで「日本の新しい安全保障戦略」というテーマで講義しました。反撃能力保持、GDP２％への防衛予算増などの日本政府の防衛力整備計画を説明した後で、戦争は装備と共に「戦争の意思」も重要な要素だが、日本は隣接する 5 つの国と地域との関係は決して良好ではない。これらの国と地域は第二次大戦を終結したサンフランシスコ講和条約にはロシアが反対し、中国、台湾、韓国、北朝鮮は不参加だった。そして現在でも北朝鮮と台湾とは国交が無く、ロシアとは平和条約が無く、フルに国交のある中国と韓国ともギスギスしてきた、というと皆ビックリしました。

ソン・サン元首相と土光敏夫国際 MRA 日本協会会長

国内紛争だらけの国々が陸続きで共存している ASEAN よりも日本の方が危険に見えるとの認識でした。

私は、二か国で様々な機会に①サンフランシスコ講和会議で日本との講和に反対する国々が多かった中で MRA の創始者ブックマン博士他がそれらの国々を説得して講和賛成に回ってもらった歴史。②1962 年の MRA 小田原アジアセンター開所式のために入国が認められた韓国の金鍾泌氏（後に首相）と大平正芳外相との合意が 3 年後の日韓国交正常化に繋がった歴史などを紹介しました。

大国間の対立に翻弄されながら独自の立場を維持してきた東南アジアの知恵から学ぶことの重要性を感じました。

6 月 3 日～ 6 日マレーシアで IC 国際会議が開催されるほか、年内にメコン青年交流プログラムの開催も検討中とのことです。東南アジアの IC による友好と和解のイニシアチブを支援していきたいと思います。

ソー・ケン副首相兼内務大臣と

第12回定時会員総会報告　副会長・専務理事　足立 憲昭

今年度の第12回定時総会は、事務所参加とオンライン(Zoom 利用）参加のハイブリッド方式によって、3月25日(土)10: 30より開催された。正会員数112名のところ、議決権行使書による参加者55名、会場参加者１５名、オンライン参加者4名で、総参加者数は74名となり、総会は有効に成立した。事務所参加者は、マスクを着用して、スタートした。藤田会長が議長として開会宣言、静かな時間を経て、会長挨拶があった後、次に議事録署名人指名があり、佐々木理事、成理事の2名が指名された。

10：40より決議事項に入り、第1号議案は議長の指名により専務理事から第11期(令和4年1月1日～12月31日)事業報告書並びに貸借対照表などの説明ののち、佐谷監事からの監査報告が行われた。特に質問等は無かったので採決に入り、第1号議案「第１１期事業報告書の報告並びに貸借対照表、正味財産増減計算書、附属明細書、及び財産目録等承認の件」は原案通り承認された。

次に報告事項として「第12期（令和5年1月1日～12月31日）事業計画書、正味財産増減計算予算書の報告」について専務理事から説明が行われた。その後、議長は第12期実施予定の公益事業に関する補足説明を担当理事に求めた。これを受けて、国際フォーラムに関して佐々木理事、学校訪問プログラムに関して木村理事、東北アジア青少年フォーラムに関して成理事、ホームページ・アーカイブに関して専務理事、そして国際会議に関して会長から、それぞれ補足として具体的説明と各理事の事業取り組みに対する考え方などが話された。続いて参加された会員からの質問と担当理事からの応答があった。

会員からの質問は、「コーでの国際会議主催者による寄附募集への日本としての対応」また、「この1年間の会員数の推移」及び「予算書の会費収入について」などであった。

《あとがき》

総会終了後、司会が大隈副会長に移り、特別講演として藤田会長から「私の人生を変えたMRA/IC運動」があり、会長とMRAとの出会い・これまでの活動歴などが語られました。話のあと、司会の大隈副会長が事務所及びオンラインの参加者に対し意見・感想を求めたところ、橋本名誉顧問、矢野名誉会長をはじめ参加者から、飾り気のない生々しい話で感銘を受けたとの感想とともに、今年度の活躍を期待する激励の言葉がありました。

なお、当協会の事業については、今年度も藤田会長を中心に理事会が一体となって、長期的視野のもと、「新しい理事会」として目標に取り組んで参る所存です。引き続き、皆さまの温かいご支援をお願い申し上げます。

ＩＣ学校訪問プログラムを開催　理事　木村　清隆

ＩＣ学校訪問プログラム（国際理解：青少年の健全育成事業）を、令和５年1月１７日に豊里学園つくば市立上郷小学校にて開催しました。この度の取り組みに関して、昨年末に発刊されたＩＣニュースに準備取組み概要を掲載させて頂きました。併せてお読み取り頂けましたら幸いです。

新型コロナウイルス感染症のため、海外からの青年ボランティアの招聘はもちろんのこと、学校訪問プログラム自体が実施出来ない状況でした。これまで国際ＩＣ日本協会において永年取り組んできた学校訪問プログラムを、学校訪問プログラム（ＳＶＰ）プロジェクトメンバーの皆様と何度もオンライン会議を開催し検討をして参りました。その様な中で国内での感染状況が落ち着きを見せはじめ、２０１０年度から訪問して来た豊里学園つくば市立上郷小学校より国際交流授業を実施出来ないかとの相談を受けました。そこで、従来取組んで来た「学校訪問プログラム」を海外からの青年ボランティアを招聘する事が難しいと考え、この度の取り組みは、筑波大学に相談をさせて頂き実現しました。また、つくば市教育局・つくば市青少年を育てる市民の会豊里支部のご支援も頂きました。ボランティア留学生の募集では「出身国の紹介」と「日本に留学したきっかけ」「これまでに失敗して悩み克服した体験」「これまでに成功した事で努力した体験」更に「他者にお世話に成った・感謝した体験」のお話をお願いしました。また、出身国の紹介をインターネット・書籍等では紹介されていない様な事もお願いしました。留学生はウクライナ・インドネシア・ベトナム・カタール・マレーシアの出身の方々が選考され取り組んで頂きました。

具体的な取り組み日程は１２月上旬にボランティア留学生６名を選考しその後、事前打ち合わせを２回行い「留学生間での交流」と「ＩＣの精神」を含め学校訪問プラグラムの準備を行いました。事前打ち合わせには足立副会長・佐々木理事にも参加をして頂きＩＣの精神に関して説明を行って頂けました。通訳は元中学校英語教師で青年海外協力隊にてアフリカでの活動した経験のある先生にボランティアにてお願いしました。学校訪問実施は令和５年１月１７日に行い、対象は小学５年生の２クラスで午前中３・４の授業時間で行い、留学生一人ひとりパワーポイントでの資料にて分かり易く、質問も活発に行われました。留学生の内一人が前日に北海道からの飛行機が悪天候のため欠航に成り来れなく成りました。しかし、前日の夜に急遽動画を作成して頂け当日会場で再生する事が出来ました。留学生の皆さんの積極的な取り組みに感心を致しました。また、小学生からは地元上郷小学校区に関して丁寧に調べ、英語で流暢にメモを見ないで堂々と発表されました。立派でした。

ＩＣ記念樹の標柱にサインしている様子

交流会授業終了後はコロナ感染対策のため、２クラスを更に半数にして４教室に別れて給食を児童と一緒に食べ交流を深め、その後、校庭にて２０１０年にＩＣ学校訪問プログラムで記念植樹した標柱に、留学生が記念サインをしました。当日は藤田会長・大隈副会長にも参加を頂けました。後日、振り返

給食の様子

りの会合を行い、留学生より感想・意見・提案を頂きました。更に、国際交流ボランティアに協力を頂いた留学生には、ＩＣ日本協会より証明書を付与しました。証明書に留学生が大変に喜んで頂けました。

この度の取り組みにて新たな課題も顕在化して参りました。対応策を検討し、国内の大学等に留学している学生の他、外国人技能実習生にも学校訪問プログラムに協力をお願いする事も考えたい。次年度においては、他の地域でも学校訪問プログラムが実施することが出来るよう様に成ればと考えております。

皆さまのご理解ご協力をお願い申し上げます。

毎日１時間の静かな時間　５人の人と、１つの問題について考えること　山田　真輝

皆さんこんにちは。2023 年 1 月にインド、ASIA PLATEAU（以下 AP）の劇場が建設されて 50 周年を記念して実施されたプログラム UTSAV（ヒンドゥー語で「祝祭」）に参加してきましたので、そのお話を少しシェアさせていただきます。

世界の理想郷といえる AP での時間は、多様な宗教や国籍、人種の人々が集まり平和に暮らし対話をする、私にとって貴重な時間でした。中南米や、アフリカ、中東、アジアの友人との出会いや再開があり、各国の若者をとりまく状況と現地での活動を聞くことはとても刺激的でした。

例えばスリランカでは、MRA 時代のレジェンドメンバーとは別に、若者が中心に集まり、長い間国内で対立を続けていたシンハラ人とタミル人の融和を行う活動を学校等で実施しはじめていること。ネパールではカトマンズのアパートで共同生活を送りながら約 6 名のメンバーがフルタイムボランティアで、活動をしはじめていること。ナイジェリアでは、ボコハラムの活動拠点もある北部エリア等でも、教育プラグラムを実施しはじめていること。ケニアにアフリカのリーダーを育成する IofC のトレーニング拠点やプログラムを提供できる機会を作り始めていること。インドでも数週間から数ヶ月にわたり遠征チームを組み、インド各地でプログラムを提供していること。東南アジアでのベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ミヤンマーのメコン川流域の国々を対象にした Mekong Youth Exchange Program が始まっていることなど、以前にも増して若者によって活動が広がっていることがとても印象的でした。ただ、強い使命感と情熱を持った若者によって動いている一方で、自身の生活基盤の脆弱性や将来に対する経済的な不安も同時に感じました。

さて、UTSAV の話に戻すと、今回の基調講演は Inner listening（自分自身）でした。プログラムの中では静かな時間は多くさかれ、主宰の Suresh Katri 氏は最後に「毎日 1 時間の静かな時間：5 人の人と、1 つの問題について考えること」で世界は大きく変わると印象的な言葉を残しています。

左が山田氏

そのようなことから、IofC とは「静かな時間（Inner Listening」だということに気付かされました。それは、人々が静かな時間を共に過ごし、自分と向き合うというシンプルな方法 (self reflection) で、自分を省みることで (correction)、より良い社会的な関係性や秩序を作ろうとする世界的なムーブメントです。その静かな時間には、自分の過ちや後悔・罪悪感からの解放や、家族、地域コミュニティ、そして、宗教や人種、国家の壁を超えた、憎しみの連鎖の融和や関係の改善など、紛争解決、平和構築、社会変革につながる強い力があるのだと思います。

最後になりますが、世界各地の IofC の人々と再開し、新たなネットワークも生まれたこと等、今回得られたことをどのように日本や世界で活かしていけるのかを深く考え、また次のアクションにつなげていきたいと思います。現在は、神戸を中心に農業者や牧場、酒蔵、商店街など、日本の一次産業や伝統産業の振興というとてもローカルな仕事にしていますが、いずれもっと広い視野を持って、より大きなインパクトをつくれるようこれからも精進して参ります。このような機会を頂いた関係者の皆さまに感謝申し上げます。

国際 IC 九州サークル勉強会について　本田　一惠

私達国際 IC 九州サークルでは、年度毎にテーマを決めて、3 月に勉強会（発表会）を開催しております。在籍会員は、約21名です。ほとんどが仕事を持ち、月の例会に集まるのは、７～８名ほどですが、勉強会開催に向けて、発表内容の進捗状況の確認や修正を行っています。直近のテーマは、2017 年『映像から学ぶ平和への道』2018 年『日本と朝鮮半島問題』2019年『ボランティアと IC』そして、コロナ禍により 4 年振りの今年は、『日本』というテーマで、3 月 4 日、5 日の 2 日間、延べ 43 名の方にご参加いただき開催いたしました。１日目は、「日本」「日本人」を再発見するために、2024 年改正の紙幣に登場する「渋沢栄一」「津田梅子」「北里柴三郎」を中心に日本の近代化に多大な貢献をした人物について学んだことを発表いたしました。２日目は矢野前会長「コロナ後における国際 IC 活動」、西日本新聞社田中伸幸氏による講演「米中情勢を中心に今後の世界と日本の進路」、会員の「日本と宗教」「コロナと共に生きる人間の資質」の発表を行いました。また、会員の提案から、今年は初めて「勉強会報告書」を作成いたします。新年度 4月からの学習テーマは、今年の勉強会で、会員が投げかけてくれたテーマ「デジタル化社会へのチャレンジ！この変革の時代を如何に活きていくか？」を学んでいこうと話し合っています。私事ですが、IC の勉強を始めて 8 年になります。大きな変化はありませんが、仲間と共に一歩ずつを止まることなく学びを継続することが、何らかの変化に繋がっているのではないかと思っています。

「きっと楽になる家族介護のすすめ」(国民総介護時代の家庭読本)のご紹介　石井　統市

この度、国際IC日本協会より、寄稿の話を頂戴しました。

世の中は、コロナ禍、ウクライナ侵攻、トルコ大地震と混乱した世界状況でありＩＣが積極的に役割を果たされる時と理解しております。この時期に国民向けの介護本を紹介してよいのかと考えましたが、いま日本は世界一の超高齢社会です。２０２５年には、認知症者数が約７００万人、２０４０年には、８５歳以上の人口が約１０００万人に達するという異次元の世界になります。誰もが障がい者になる可能性のある時代になりました。

いま国民が自ら手を打たなければ国が一気に衰退していく問題でもあります。日本の解決策をこれから高齢化が進むアジア諸国に紹介していくことも日本の使命であり、ＩＣ の考えに沿っていると思い、紹介させていただくことにしました。

この度、私は 20 代後半で人生の師、兼松正先生に MRA を紹介され、藤田幸久さん、長野清志さん、足立憲昭さん達と熱く語りあい、その後指導をいただいた山﨑房一先生を懐かしく思い出しました。本を書いた動機は、大手企業を定年退職後勤務した出版社を６８歳で辞し、親の介護をして頂いた介護職員の皆様への恩返しに介護学校に 6 か月間通って、7 年近く介護職員として勤務しています。そこで 13 年間の親の介護の反省を踏まえ、介護の専門職として「きっと楽になる家族介護」をお伝えしたく本にしました。

簡単に拙著の内容を紹介させていただきます。本の中では介護学校の専門書からプロの介護のコツを多く引用しています。これから介護をされる方にすぐに役立つ手引書として、日常生活の中で使われる言葉で説明しています。

第一章は、「老化の理解について」書いています。目からうろこの章です。老化を理解頂くと優しい介護が出来るようになります。

第二章は、「知って安心　家族介護のコツ」です。食事の介護、排泄・尿失禁の介護、入浴の介護、衣服着脱の介護等の楽な介護のコツです。

第三章は、「認知症について」です。知識習得が非常に大切です。日常生活のケア、介護する家族のストレスの解消等です。

第四章は、鼎談です。この本を書くように強く勧めて頂き推薦文を寄せられた辻哲夫先生（元厚生労働省事務次官、元東大教授）、本の企画全般にご助言を戴いた長崎昇先生（日本能率協会コンサルティングチーフコンサルタント、国土交通省国土交通大学校講師他）と私の三人で本の核心部分を論じています。

これまで産経新聞、読売新聞、毎日新聞、日刊工業新聞、南日本新聞に書評や取材記事が掲載され、雑誌「財界」や「監事」、「介護ビジョン」、「プレジデント」、全国社会福祉協議会他団体全国機関紙数誌にも記事が掲載されました。経済誌「財界」では 2 回の対談記事も掲載されました。現在、病院・介護施設経営者向け季刊雑誌「監事」の連載中です。

介護をもっと楽にしたい方、近い将来介護で心配な方々には是非お読みいただきたいと思っております。

（経歴：1947 年生まれ　国際 IC 日本協会会員　元出版社専務　現在介護事業所（株）ゆいのパート職員・介護福祉士、2020 年 12 月「きっと楽になる家族介護のすすめ」を財界研究所より出版）

青空の高さに気づいたように　詩人 日向　裕一

交流会「論語塾」に参加されている日向裕一様（非会員、広島県在住）から、論語塾のご感想をご寄稿頂きました。「論語塾」を通して交流の輪が広がることを有難く思っております。（事務局）

私は、矢野弘典先生（名誉会長）の論語塾に zoom で参加させて頂いています。論語塾の講義内容は、毎回、新しい発見があり冒険のように私の心に響きます。経営者だけではなく、リーダーを志す若い世代にも講義を聴いて頂きたいです。世の中では、グローバルという言葉が飛び交っていますが、論語塾の講義は、まさに現代社会に最も大切なことを語られています。矢野弘典先生は、「問題の原因は小さな事にある」と言います。　そして、傲慢なリーダーではなく、様々な意見や話を聴くことがリーダーとして必要なこと。私は論語塾に参加して自己気づきがあります。私の自己気づきは、「現場主義」です。現場のことを直視した「判断力と決断力」がリーダーには問われていると思います。現場に答えがあり、リーダーとしての「自覚・責任感・覚悟」を求められています。今、世界中で「リーダーとは何か」も問われていると思います。国であれば国民に愛されて尊敬できるリーダー、経営者は同じくリーダーとして部下との信頼関係も必要と感じました。

私事で恐縮ですが、詩人として文化・福祉・教育の活動をしています。

ホームページ検索『日向裕一』

「木彫り教室のご案内」

コロナ禍で、お休みしていました「木彫り教室」が４月より再開する事となりました。

長い年月を経て育った木に触れることは健康にも良く、何よりも人生の楽しみとして頂きたいと思います。

教室では、楽しい雰囲気のなかで、木彫りを学んでいただけます。

初めての方でもご安心ください。

コーでのワークショップ

【開催日】月１回　土曜日
【材料費】実　費
問い合わせ：加藤　亮子　090-2325-8507

事務局からのお知らせ

コー、マウンテンハウスの絵

今号の「IC ニュース」は、3/25 に開催された定時会員総会についての内容をお伝えします。総会当日は、あいにくの雨でしたが、会場までお越しいただいた会員の皆様、また ZOOM でご参加いただいた皆様、さらには議決権行使書（葉書）をご返送いただいた皆様、ご協力有難うございました。また、ご多忙の中、橋本名誉顧問と矢野名誉会長には、四谷の事務所まで出向いて下さりました。篤くお礼申し上げます。

さて、最近事務所に貴重な絵画が寄贈されました。中嶋勝治様（故人、元会員、会員の中嶋良樹さんの父君）が描かれたコー、マウンテンハウスを描いた絵です。藤田会長の母君が所有されていたものです（写真参照）。事務所に飾ってありますので、皆様事務所にお越しの際には是非ご覧頂きたいと思います。

二宮様のご寄贈の書籍

また、二宮秀夫様（故人、元会員）のご遺族様から二宮様のご遺品の書籍を中嶋良樹さん経由でご寄贈いただきました（写真参照）。事務所で所蔵しておりますので、これも事務所でご覧いただけます。

丸３年間に亘って猛威を振るったコロナウィルスも、どうやら世界的に下火となってきたようです。今年の７月にはコーで国際大会が開かれますが、世の中でリアルの会議が復活する年となりそうです。